

kurashi@mainichi.co.jp

遺品整理代行「命を扱う」

人は死んだ後、多くのモノを残す。身の回りの家財道具、思い出の品、時にはため込んだゴミの山までも。そんな遺品の一切合財を、遺族に代わって整理するサービスが広まりつつある。小説・映画のモデルにもなった遺品整理の専門会社「キーパース」(本社・愛知県刈谷市)の作業に同行した。

「キーパース」社長の吉田さんには元々、引っ越し業を営んでいた。00年、大阪で一人暮らしをしていたお年寄りが亡くなり、遺族から家財道具の搬出を依頼されたのが、遺品整理を始めるきっかけだった。

「キーパース」社長の吉田さんは元々、引っ越し業を営んでいた。00年、大阪で一人暮らしをしていたお年寄りが亡くなり、遺族から家財道具の搬出を依頼されたのが、遺品整理を始めるきっかけだった。

吉田さんには当初、大きな悩みがあったという。「家族の遺品の整理までも他人に任せような風潮を作ったのは誰だ」。そんな批判が起きるのを恐れた。しかし、親と離れて住む遺族にとって、気持ちだけはどうにもならない現実があることも分かった。

東京都世田谷区の古びたマンション2階の一室。2LDKで、窓を開けると下を私鉄の電車が音を立てて走っている。一人暮らしをしていた住人の女性は9月、88歳で世界一の女性には死にたくない」と強く希望し、2年間、在宅で闘病生活を送っていたという。

「キーパース」社長の吉田さんには元々、引っ越し業を営んでいた。00年、大阪で一人暮らしをしていたお年寄りが亡くなり、遺族から家財道具の搬出を依頼されたのが、遺品整理を始めるきっかけだった。

「キーパース」社長の吉田さんは元々、引っ越し業を営んでいた。00年、大阪で一人暮らしをしていたお年寄りが亡くなり、遺族から家財道具の搬出を依頼されたのが、遺品整理を始めるきっかけだった。

吉田さんには当初、大きな悩みがあったという。「家族の遺品の整理までも他人に任せような風潮を作ったのは誰だ」。そんな批判が起きるのを恐れた。しかし、親と離れて住む遺族にとって、気持ちだけはどうにもならない現実があることも分かった。

長男(68)＝東京 都練馬区在住

遺族の思い尊重

ニーズ多様、生前予約の相談も

車に一時保管。各所の供養品を1カ所にまとめ、読経

依頼を受け、10月末、「キーパース」のスタッフ5人がマンションに集まった。四十九日を翌日に控えていた。「では、これから遺品の整理を始めます」。同社東京支店のリーダー、石川伸哉さん(31)が神妙な表情で号令をかけた。室内には介護利用の申請書類などが目立ち、ヘルパーの引き継ぎ帳も数冊あった。

「キーパース」社長の吉田さんには元々、引っ越し業を営んでいた。00年、大阪で一人暮らしをしていたお年寄りが亡くなり、遺族から家財道具の搬出を依頼されたのが、遺品整理を始めるきっかけだった。

「キーパース」社長の吉田さんは元々、引っ越し業を営んでいた。00年、大阪で一人暮らしをしていたお年寄りが亡くなり、遺族から家財道具の搬出を依頼されたのが、遺品整理を始めるきっかけだった。

吉田さんには当初、大きな悩みがあったという。「家族の遺品の整理までも他人に任せような風潮を作ったのは誰だ」。そんな批判が起きるのを恐れた。しかし、親と離れて住む遺族にとって、気持ちだけはどうにもならない現実があることも分かった。



一人暮らしの女性が残した人形を手際よく片付ける「キーパース」のスタッフ＝東京都世田谷区で、丹野撮影

©2011「アントキノイノチ」製作委員会

小説・映画のモデルに

遺品整理業を描いた映画「アントキノイノチ」(瀬谷敬久監督)が19日から、全国公開される。写真は、さまざまな人の同名小説「遺品整理を通して生きる」という意味を見いだしていく若者の姿を描き、「キーパース」がモデルになっている。映画は岡田将生さん、榮倉奈々さん主演。今年度のモントリオール世界映画祭で、革新的な作品に贈られる「イノベーション賞」を受賞した。

最近増えている相談は遺品整理の生前予約。子どもにも迷惑をかけたくない」という理由のほか、定年後の趣味で焼いた陶芸作品を「自分の死後、ゴミのように捨ててほしくない」という人もいます。おおよかな見積もりを出すと「これではとっちらかると言われる。ただし、「中小企業で先々のことは分からないので、契約までは結べない」という。

同社は現在、北海道から九州までの全国6支店で、年間約1500件の依頼を受ける。同業他社の参入も増え、価格競争が始まっている。吉田さんは「サービスの質を軽視すれば、行き着く先はただのゴミ回収業。命を扱う仕事だ」という自覚を持ち、適正な競争をしていきたいと話した。